

# 「市制一〇〇年」行事の在り方

山内 亮 史

北海道では今年、札幌、函館、旭川など、「市制一〇〇年」を迎えた市町村は多いことだろう。これを地方自治の歩みの一〇〇年と考えるだけでも、実に多様にして重層化された課題があることは自明である。旭川では八月一日に式典があり、一〇月にも祝う式典があるとのことである。今、この三市をとってみても、人口減少傾向は顕著で、地方の疲弊は深い。

したがって、市制一〇〇年を祝うとすれば、その行事の持ち方に首長と担当職員（大抵は総務課の業務の範囲か）の問題意識が見てとれる。

ここで紹介したいと思うのは、五十嵐広三氏の「市制五十年」と題する短い随筆である。氏はまず、「この半世紀は波乱と苦悩にみちた歴史であった。悲惨な戦争の時代をさきんだ変転の半世紀であったが先人たちは、北方人らしい深い思慮と強じんな忍耐によって、営営として都市自治のなかに独自の文化を養ってきた。いま、そのことに、わたしたちは深い感銘を受ける。」と書き出し、次のように自己の願いを述べる。「そして、その母胎のうえに巨きく、美しく、もつとも人間的な都市像をえがきながら、互いに決意を確かめあい、力づよい出発をしたいと思うのである。」（五十嵐広三『随筆集 北斗七星』一六

五〇一六六頁、昭和四七年一月）と。

そして、新しい総合開発計画がスタートすることにつなげ、その政策を要約する。曰く「研究学園都市の基礎を定め、知的産業への構造改革にとりくみ、自然と融和することを忘れない未来都市旭川を創っていく。わたしたち市民のまちづくりの仕事は、また、これからはじまる」。

ここから氏は、その最大の美質といってよい情熱溢れる呼びかけをする。「自由や生活を守ることはもちろん、市民がその責任と愛情を分かちあい、連帯してたがいの日本列島に対して、毅然として独自の存在を主張し、自立する都市を創っていく。ことしの春実現する日本で最初の買い物公園の本格造成は、そのような明日の都市像を象徴し、出発点を祝福することになるだろう。わたしたちは、わたしたちの都市自治体をわたしたちの手でどう創っていくかを討論しようではないか」。

この格調と説得力はどうだろう。私はこれを読み、五十嵐市長本人と当時会い、就任二年目で経営危機の中に在った開学間もない旭川大学を逃げ出すのではなく再建しよう、そして、地域に寄りそう大学を創ろうと腹を固めたのだった。

以後の五十嵐氏の思想と行動は周知のこと

であるのでここでは省かせてもらおうが、後に細川連立政権での建設大臣、村山内閣での官房長官としてその成立に深く関わった「地方分権推進法」の成立は、この「市制五十年」の時の想いのストレートな延長とみることができる。なぜなら、機関委任事務の廃止問題一つとっても、官僚の大きな抵抗、頑強な族議員らの反発が水面下で起こり、官邸、省庁、与党内部で困難を極めたことがわかるからである。地方分権は社会党のシャドーキャビネットの自治大臣を経た宿志であった（五十嵐広三『官邸の螺旋階段 市民派官房長官奮闘記』）。

今、市制一〇〇年の行事に自治体の首長と担当職員等はどうのよう張りつめた問題意識をもって関わっているのだろうか。私の狭い知見の範囲のせいなのか、通り一遍の式典の話しか聞こえてこない。札幌市などそれから計画されていないという。

市制の一世紀、やはりしっかり総括を行い、継承すべき点、その歩みにリスクを込め、まちづくりの目標、政策理念にそった課題を整理し、未来につなげることが求められる。

やはり根底には首長の思想が据えられることが望まれる。なぜなら、一政治学徒の「自治体首長論」への期待として、かつて十亀昭雄当研究所理事長は、「政治は、結局、人間の営み」というあまりに平凡かつ当然の真実に導いてくれると、五十嵐市長の自治の実践を評したからである。

ハやまうち りょうじ・旭川大学教授